産経新聞　＜第三種郵便物認可＞

【仕事人】

「社会のひずみ知って」

遺品整理会社 代表取締役 吉田太一（よしだ たいち）（45）

急成長を続けるとある企業の東京支社の倉庫。先日まで遺体が横たわっていたというベッドマットを立てかけ直していく。関東中から集められた家具や衣服などあらゆる家財道具が所狭しと積み上げられている。すべて既にあの世に旅立った人々が残した「遺品」だ。

「遺品はゴミやない。故人の性格や趣味、交友関係などその人の人生すべて」

そういって、供養や処分の順番を静かに待つ遺品に手を合わせた。

生粋の大阪人。高校卒業後、板前修業を経て上京し職を転々とした。結婚を機に帰郷し運送会社を立ち上げたのは平成6年。そこで形見分けの運送を依頼してきた顧客が、大量に残された遺品の処分に悩む姿をみた。

「そのお客さんの遺品整理を手伝ったら想像以上に感謝され、『これは商売になる』と商売人の勘が働いた。成功するには、競争の激しい業界でのし上がるより、他人と違う新しいことをする方が早い」

14年に世界初の遺品整理会社キーパーズ（本社・愛知県刈谷市）を起業。遺品の引っ越し屋だ。遺品の梱包と配送業務から写真などの供養、遺体のあった部屋の消臭、清掃まで一手に引き受ける。平均料金は25万～30万円だ。

創業から7年。わずか300万円で始めた会社は、高齢化や都市化といった世相を反映し、いまでは全国4支店、年商4億5千万円まで成長した。

年間の取扱数は約1800件。うち9割が孤独死した人の遺族からの依頼という。死後しばらく発見されなかった変死事案も年に300件ほど舞い込む。取材中も変死事案の依頼が携帯電話に飛び込んできた。

長期間発見されないケースは、介護保険が適用され訪問介護が受けられる独居老人よりも、50～64歳の男性に多い。家庭や仕事で失敗した1人暮らしのサラリーマンがリタイア目前に亡くなるケースが典型例で創業当初、何度も「廃業しようかと本気で悩んだ」と明かす。

同じ団地の1階下に住む父親の死に1カ月も気付かなかった息子。部屋の鍵を渡すだけで部屋にも入らず一切をキーパーズにまかせて去っていく遺族たちに至っては数え切れない。

「本当は遺族が遺品整理するのが理想的。自分の仕事が人情味のない社会の風潮を助長させるのではないかと後ろめたかった」

だが、思いとどまらせたのも、また遺族だった。

「見積もりのとおりでいいからすぐに作業してくれ。ここで起きたことを早く消してしまいたいんだ」。22歳の一人娘を放火殺人で失った父親のうなだれる姿に胸が詰まった。

「遺族からの感謝の言葉や手紙を受け取ることも多い。本当は自分たちで整理したいが、いろいろな事情でできない人、それから、遺品整理してもらえない人がいることを知った」

新たな取り組みを始めている。独居老人の孤独死をアニメ化した無料のDVDを製作、さらに「エンディングノート」を無償配布した。ノートは1万部が瞬く間になくなり増刷。DVDは行政で使用され、欧州など海外からも問い合わせが来るという。

だがこれらの活動を「ボランティアではなく、商売のため」と言い切る。

「本当に人に喜んでもらえる仕事じゃないと、長期にわたってお金を稼ぐことは不可能。みんなが現代のライフスタイルを変えればキーパーズはいらない。矛盾しているようだが、キーパーズの発展、活動を通して社会のひずみを知ってほしい」

商魂の陰に、人々の最後のお引っ越しを担う「おくりびと」の使命感をのぞかせた。

（文・写真　宮原啓彰）

毎週日曜日に掲載します

遺品はその故人の人生すべてという吉田太一さん。衣服から愛用の人形まで遺品の眠る倉庫で「本来は遺族が整理するのが理想」と語った

きのうの気温と湿度　あすからの天気　あす　22日(火)　23日(水)　24日(木)　25日(金)　26日(土)